

〔論説〕

危機のなかの古典（続々）

——村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』——

與那覇 潤

一

「ウクライナの戦線で一人のロシア軍の兵士が塹壕を掘っている最中にそれをみつけたの。彼はただの牛か大鹿の頭骨だと思ってそれをそのへんに放りだしておいた。そのまま事が済めば、そんなものは歴史の闇から闇へと葬られたはずなのだけれど」⁽¹⁾（上・二〇三頁）

ようやく世界の新型コロナウイルス禍に終わりが見えてきた二〇二二年二月二十四日、ロシアが突如侵攻して始まったウクライナ戦争は、一年以上が経ったいまも終わりが見えない。宣戦布告なしの「特別軍事作戦」を自称し、数日でキーウのゼレンスキー政権を転覆するはずだったプーチンの思惑も、欧米諸国が支援する最新兵器でウクライナ軍を圧勝させようとする西側陣営の期待も外れ、泥沼の持久戦が続いている。

二〇一〇年代に語られた予測では、先進国は動員された兵卒が武力でぶつかり合う「古い戦争」から解放され

るはずだった。今後生じる国際紛争は、サイバー空間の情報操作を通じて敵国民を誘導するハイブリッド戦争の形をとり（一四年にロシアがクリミア半島をウクライナから奪取した際は、確かにそうだった）、やがてはAIを搭載したロボットやドローンのみが雌雄を決する「人の死なない戦争」へと移行する——そんな楽観論すら珍しくはなかった。⁽²⁾

実際に開戦を決断したプーチンは、首都への急襲と内通者のネットワークの一斉蜂起によって、ウクライナの統治機構が全土で瞬時に瓦解する電撃的な勝利を夢想した可能性がある。⁽³⁾しかしその見取図はあっけなく潰え、むしろかつての二つの世界大戦さえ想起させる「限定全体戦争」とも呼ぶべき巨大な暴力が出現した。「全体戦争」は「ナチス・」ドイツの対ソ戦争のように敵国の政治・経済・国民を完全に破壊ないし支配することを目標とする戦争で……仮にプーチンがウクライナの独立を否定することを目的としているなら、第二次ロシア・ウクライナ戦争はまさにこれに該当しよう。⁽⁴⁾

そうした危機の時代に、さまざまな要因によって同戦争の当事国にはなり得ない、つまり狭義の形で「参戦」することはあり得ない私たちは、なにを考えるべきだろうか。

手がかりとなる現代の古典を、私たちは有している。冒頭に引いたのは、村上春樹の初期の代表作『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の一節だ（以下『世界の終り』と略記）。単行本が刊行された一九八五年にはまだソ連が健在であり、したがって引用に言う「ウクライナの戦線」もむろんロシアとウクライナの戦争ではなく、人類初の総力戦と呼ばれた第一次世界大戦の東部戦線を指している。